

展勝地風土記

Vol.8

平成26年4月25日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会は、100周年に向けた取り組みとして、展勝地をより深く知っていただくため、さまざまな情報を紹介しています。本年度1回目は、展勝地の計画立案に尽力いただいた井下清氏の作品をご紹介します。整備当初に携われた人々の思いを感じていただきたいと思います。次回は7月25日に発行します。

『奥州立花の櫻』

井下 清

東京以北の桜の名所を数え上げれば決して少なくはないが、大勢の人があまり興味を持たないのは桜の罪ではなくて、単に東北ということの結果ではないだろうか。

謡曲にある常陸の桜川。飛花鎧袖に降り散りし、吹く風の「勿来の関」。老彼岸桜で名高い仙台の榴ヶ岡。歴史上、陸奥の武人の雅心を伝える東稲山の桜。天下の奇観とされる盛岡の石割桜など、数え上げれば限りがない。

これに、最近植えられた公園などの桜名所を加えると、東北は桜の国として十分に誇れるのである。

我が国の桜の分布上から見ると、北海道の紅山桜と関東以西の白山桜とが奥州地方で自然交錯すべきであって、この点からいえば、当然東北において我が国最大最美の桜名所が現れなければならないのである。

東北本線で仙台から北八〇哩、盛岡の手前三〇哩のところは黒沢尻という小さな駅がある。藤原四代の旧跡である中尊寺や毛越寺で著名な平

泉、観測所で知られる水沢、古代の鎮守府があった胆沢城跡のある金ヶ崎、その次が黒沢尻で、その次は温泉町花巻である。

この名所旧跡と温泉地帯に前後をさし挟まれていた黒沢尻は、数多くの鉱山に囲まれている小都であり、それらの物資の集散地であり、風光明媚な歓楽郷である。北上川の川面を火で覆うような大規模の灯籠流しなどがあるのもここなればこそである。この黒沢尻の東に、立花山の展望のきくところがあつて、それを桜の名所として装景しようとする計画がこの町の有志によつて起こされ、今や第一期の工事に着手している。

立花山一帯は、従来あまり注意をひかなかつたのは当然のことであつて、五串溪の奇勝や、松島の壮麗と比較することは無理である。しかし、磨かれていない、洗練されていない、いわゆる山出しの美があつて、これに必要な装景をし修飾したならば、十分に天下の名勝地になり

うる素質を持つている。現在の極めて粗野な、また永く荒らされてきたこの地を名勝地の部に入れることは、月並みのお国自慢として聞き流されるのも無理もない。

立花の景色の良さはその地理的配置が妙を得ているのであつて、風景の骨格をなすべき山嶺溪谷と清流奇岩とが実に広大秀麗な眺望を有している。しかし、それを部分的に見る時、ある二、三の場所を除くほかは樹木は乱伐されて、低い雑木林が全地を覆っているだけである。昔はさ

ぞ変わることはない美しい緑の老松や柏の古木が生い茂り、切り立った崖には紅杜鵑が点在し、山頂には千年の老松が梢を鳴らし、谷あいには清水の流れる音が響きわたり、名前も知らない山草は岩間を絶妙に生えわたり、老蔓は大蛇のように谷川を渡り、サルオガセは密林の枝に付着し、山裾に生えるさまざまな草はその名のとおり美しく咲き誇つたであろう。昔、口内の領主が、仙台の伊達藩主へ国見山を越えて参勤したという山路の松並木は今も残つてい



井下 清

1884年～1973年 造園家。東京市(現在の東京都)の公園課長を務め、東京内の公園緑地を多く手掛け、公園行政の基礎を築いた。退職後、国土緑化推進委員会常任委員、首都緑化推進委員会常任委員長として緑化事業に専念したほか、母校東京農業大学の教授、理事、常務理事を務めた。公園では井之頭公園、太平山公園(郡山市)、弘前城公園(弘前市)、日和山公園(石巻市)、須磨離宮(神戸市)、墓苑では多磨霊園などを手掛けた。

※1 飛花鎧袖…出典不明。
※2 吹く風の「勿来の関」…千載和歌集所収・源義家朝臣・ふくかぜをなこそそのせきとおもへともみちもせにちるやまさくらかな。
※3 五串溪の奇勝…いつくしけい・巖美溪のこと。

て、過ぎし日の高雅な自然を語っている。古城跡とみられる豊山の眺望は、今も昔も奥州路を旅する人々の眼を驚かせていたであろう。もし、少しの時間をとって豊山に上がった人は、比類なき眺望に嘆賞の声を上げるだろう。しかし、いずれにしても現在ではこの立花国見の素晴らしい景色を説明することは、冒流した自然を心から惜しむ思いの表れであり、これまでの冒流を償うことに繋がる。償いとはなんだろう。立花と国見の自然を昔に戻し、さらに周到な装景をして、その天眞の美を広く紹介し、全世界の人々に幸福を分けることではなかるうか。

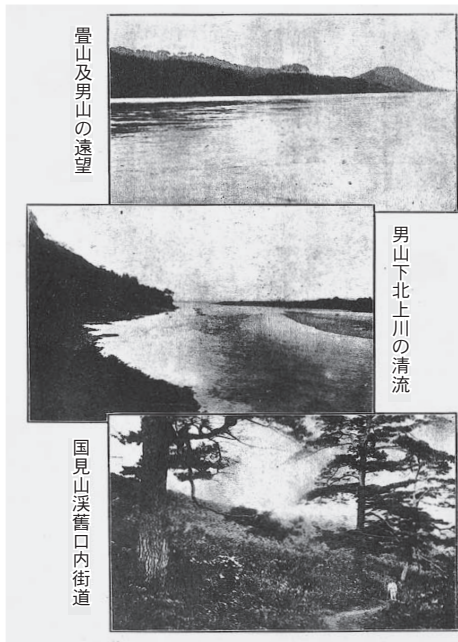
立花展勝会のこの計画は最もふさわしい事業であって、全国津々浦々に国土の美を尊重し、愛護すべきであるという理論を奨励するのろしとなるものであって、私たちはもろ手を挙げてこれに賛成するのである。ここで、もう少しその土地と目的と事業について記したいと思う。

立花の景勝地は、黒沢尻町の東、北上川の対岸にある一帯の連なる丘の総称であって、町からその全景を望むことができ、町から歩いても数十分の道のりである。町の東北隅に珊瑚橋が架かり、橋を越えた北方の山の麓に立花の村落があり、川に沿って南に曲がると、幅十間の公園道で豊山の下に至る。豊山はその根を北上川によって洗い崩された岩山で、高さは水面から十丈にも及び、

山頂には数百年の老松が生い茂り、頂上は平地となっていて数百人の登頂も可能である。山の下に芭蕉の「梅が香にぬつと日の出る山路かな」の句碑が立っている。この丘から西を望むと、和賀川は真つすぐに足元に流れ、北上川に合流する。丘を下ってさらに川沿いに南下すると男山があり、国見山脈の西端にあたる。山の下は稲瀬の渡しがあり、西行の「みちのくの門岡山のほととぎす稲瀬の渡しかけて鳴くらん」の句で有名である。豊山から東に山脈の野を分け入ると国見山溪があり、往時の国見山大伽藍はこの辺りだろうか。西方を仰げば国見山神社が山頂に鎮座するのが見える。沢から羊腸のように曲がりくねった山道を上ると、国見の山頂に達する。山はそれほど高くはないが、西南には北上川流域の平野が眼下に開かれ、東には陸羽の山々が重積しており、対照の妙を極めている。西には遠く羽越の山脈が霞のように連なり、北上・和賀の両河とともにこの風景の核心を成している。珊瑚橋たもとから国見山頂に至る周遊は、わずか三里にも満たず、豊山から国見溪の辺りまでの往復となると、その行程は一里にも満たない。長くて半日、短くても二、三時間の、ぶらつき程度の行程であるから、名勝地として将来を託すには第一の場所である。

今回の立花展勝会の計画は、この地の最大欠点である乱伐されたまま

手付かずの木や草について、初めに山々の常緑樹の保護育成を第一優先とし、それに加えて植栽するのは、我が国土と我が民族史上外してはならない桜である。我が国で桜の名勝は多いが、どれも大規模のものは単純であり、私たちが誇るべき桜の各種各様の美をことごとく集めているところはいまだに存在しない。しかし、立花展勝地計画においては、珊瑚橋を渡った立花村落には桜の品種のうちでも人為的品種、すなわち荒川の八重桜を植え、奈良時代以来永きにわたって育成されてきた桜の花を集め、川に沿って新設する公園道には、東京染井村にて造られたとされる染井吉野桜を植え、東京の隅田川堤や江戸川の桜に匹敵するところとする。豊山から国見に至る山々には桜の天然の変種を網羅し、吉野の一目千本と比べてみせる。また、遊覧路沿いには香桜、または、特に変化の多い奇品を配植し、武蔵小金井(桜)を移植する。園内各所には、歴史上の桜にちなんだ出来事が書かれた標石を立て、立花村には「桜館」を建設し、桜研究者の参考となる資料を陳列する。これらの事業は、黒沢尻町はもちろんのこと、岩手県として、



「桜」に掲載された挿絵

いや我が日本国として最も意義のある国家的景勝地として世界に誇れるものとするものである。

黒沢尻町は、現在はただ東北の小さな村ではあるが、立花展勝地区を対象としたこの計画は、実に国家的な計画であって、総理大臣原敬が深くこの計画を称賛し、自ら多額の賛助金を支出したのを始めとして、官民の名士達が援助を惜しまないのは、実に喜ばしいことである。

終わりにあたり、われらは、この事業が中断することなく、今といわず未永く継承し、完成されるように切に願うものである。

【出典】河本寿之「桜」大正版第一巻(第一、四号)、桜の会編纂、有明書房発行、昭和55年3月
【意訳】北上さくら会